

他に嫁せず云々

山陽との關係よりして終生嫁せざりしの一事は頗ぶる議すべきものありと雖も、また平生の抱負を考察し、爲めに、後年山陽の盛名あるをさへて耻悔せし如きはや、人意を強うするに足るの美談にわらずや、今の滔々たる女流中、女史の如き、意氣、節操、を持する輩幾くかある、予は左の自述の詩を讀むで、感甚だ堪ざるものあり、

三從總欠一生涯、漸逐衰顏益放懷、擬試畫毫裂羅帶、爲柱瓢口卸銀釵、吟題洗雨蕉箋破、塗抹書空雁字排、唯恐人間疎嬾婦、強將風月做吾儕

結末二句の如きは自から風月に耽るの本意にあらざるを洩らしたるものならざらんや。(未完)

黒澤登幾子 (第二卷第十)

下村三四吉

登幾子が國事を憂へ藩主の冤を纏述せる長歌はかくて、畏くも 歡覽を經るに至りぬ。實にその歌中にいへるが如く「野末に匂ふ梅が香を天津空まで傳へあげ」彼が初志を貫徹しけり。是れ必竟その身を顧みざる熱誠と和歌の徳とによれるなり

雨雪の厄風霜の苦に耐へて、芳香天地を薰する梅花は、採て以て登幾子の清操に比すべし。

既にして、登幾子は、京都を出で、岩清水社に謁でて祈請をこらし、それより、澗川を下りて大坂に着き、また讃岐に渡り、琴平宮その他に參詣し、再び大坂に歸航し、一商家に投宿せり。この行は、餘波に過ぎざれども、登幾子が用意の周到なりしことを見るに足らん。蓋し、幕府の偵察甚

だ嚴密なるを以て、巡禮の態して京都に達するこ
とを得たるより、歌を宮中に上りし以來更に、
神社佛刹を巡拜して、益々嫌疑を避けんとしたる
なり。登幾女は固より一身を顧みず、しかも、家
にはなほ老母の在るあり、藩主の冤枉は未だ洗雪
せらるべきを必せず、されば、徒に幕吏の手に執
へらるるが如きは、及ぶかぎりこれを免れんこと
を怠らざりき。

幕吏の嚴密なる注意と奇察なる眼とは、遂にこ
の忠烈なる登幾女を脱せしめず、四月朔日登幾女
は逮捕せられ、牢屋敷揚り屋入りの身となりぬ。
さきに座田維貞に差出し、乙夜の覽にも入りたる
彼の長歌につきて種々取調べられ、はては水戸藩
公の内旨を承けて上京せらるるならんとの糺問をさへ
受けり。登幾子屈せずして曰く、今回の事たる國

家の一大事にこれあり、加ふるに藩公の謹慎の儀
は全く冤罪によれることなれば、國のため、一天
万乗の君のため、藩公のために、おのがおもふと
ころを達せんとて上京しつ、また外夷どもの我神
州に入りこみて、この尊き御國のけがされんこと
を憂へて神社佛寺へは參拜しつるなり、藩公の密
旨を承けたりなどは以ての外のことなりと、意氣
凜然たり。幕吏も亦これを如何ともすること能は
ず。

十一日に及びて京都へ引渡すべしとの達しあり
て、京都牢屋敷會所の揚り屋入りとなり、所司代
役所、西町奉行所等にて糺問せらるること數回に
及びしも、登幾女は前に申し開ける如くにて、い
さゝかかはれることばもなかりき。

次ぎて、五月十五日には、更に江戸表に於いて

糺問すべしとて押送せらる。同廿八日品川に着き
 それより、一時江戸北町奉行所の假牢に入れられ
 じが、後には傳馬町の獄に移されぬ。この間にも
 數回の召喚糺問を受けたれど、ここにはくはしう
 記さず、登幾は意氣毫も撓まず、全く國恩に報い
 奉らんと爲なるよしを申立て、係りの役人をして
 また追窮の語なきに至らしめき。心事正大にして
 意氣凜烈、固よりさもあるべし。

この年の十月、幕府は大に意士を處刑して、幕
 政に反對せる氣焔を鎮壓せんとしてり。所謂安政の
 大獄はこれなり。(事は津崎矩子の傳中に詳し)こ
 のとき登幾女は追放に處せられ、江戸十里四方、
 山城國常陸國御構の事となれり。御構とはその指
 定の地に立ち入ることを禁ぜらるるなり。よりて
 登幾女は郷里に近き下野の茂木村に寄寓して、老

母の安否をも問ひ慰めたり。

後數年を経るうちに、幕府は内外の多難に迫ら
 れて、土崩瓦解の有様に陥り、遂に、王政は復古
 せられ明治維新の世となりぬ。されば登幾女も、
 今は別に赦免の令は受けねど、冤罪は自ら雪がれ
 自由に郷里に歸棲し得るに至れり。

明治七年、登幾女歳六十九、茨城縣廳より其の
 忠烈の行事を具して朝廷に恩命を上請しけるに、
 その忠節を嘉賞せられ終身現米十石を下賜せらる
 べき優旨を下したまはりき、その褒辭は曰く、「夙
 に志を尊王に篤くし、力を國事に盡くし、安政
 戊午の歳潜に京師に上り、幽囚に就けりといへど
 も、終始その志を渝へず、因てその奇特を賞し
 米十石を汝登幾に賜ひ、以てその身を終へしむ」
 と。嗚呼これ登幾女の心事行狀を悉くせり、余

輩更はいさるに賞讃せうさんの蛇足だそくを添そふるを要たうせず。

(完 結)

しきしまの大和心をくみて知る

なにはのわしのつゆのめぐみは

(登 磯 女)



落 椿

雨 峰 生

墓門一樹の椿あり、年ごとにさきては空しくちる、
たまく小女の手折りて父の墓にまゝぐるあり、
よりてこの歌をつくる

寂さびし小寺のもりかげに

春の恵みにうるはひて

咲さきし椿の七重八重

運命さだめやいかに謠ふべき

梅の香ひにくらぶれば

浮動にめづる姿なく

櫻の色いろにくらぶれば

宿りを契る影もなし